東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

中東和平についての時事英語教授法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横島, 菜穂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/805

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中東和平についての時事英語教授法

横島菜穂子

学生のニュースに対する関心は高い。就職活動が近づくにつれ，世界の動きに無関心ではいられなくなるからだ。英語を学ぶ学生はこのニュースを英字の新聞や雑誌で読みたいと言う。ニュース記事には普通は翻訳がないので，時事英語を学ぶには努力が必要である。

こうした情勢から最近では数種類の時事英語の教科書が出版されている。これらの教科書はニュースをアメリカ，ヨーロッパ，アジアなどと地域別に，あるいは政治，経済，社会などとジャンル別に分類しているので，ニュース全般を学ぶうえでは役に立つ。しかし何と言ってもニュースが古くなっている。そこで英字の新聞や雑誌を教材にして，ホットな重要ニュースを取りあげることが大切になる。授業ではそのニュースの内容を知るだけでなく，世界の大きな動きのなかでどう位置づけるかを，解説を加えながら教える。学生はそれについて考え，自らのオピニオンを持てるようにする。このことが時事英語教育の最大の目的である。

この小論では中東問題を取りあげた。ユダヤ人とパレスチナ人の紛争はすでに長い歴史があり，この紛争は最も深刻な地域紛争のひとつである。時事英語を教えている経験から言えば，学生のこの問題に対する関心はかなり高い。ある学生は，「この紛争は生活の問題から来ているのであって，宗教がちがうというのは口実に過ぎないのではないか」と質問した。これは鋭い意見である。エルサレムはユダヤ教にとっても，イスラム教にとっても，さらにキリスト教にとっても聖地であり，ユダヤ人とパレスチナ人がエルサレムの帰属をめぐって争っているが，この紛争はパレスチナ人が国家をもっていないことが基本的な原因である。

グローバリゼーションの隙間での地域紛争

20世紀最後の10年あまりは激動の時代であった。この期間の目を見張る出来事は旧共産圏諸国が市場を開放し，アメリカ主導で政治，経済のグローバリゼーションが進んだことである。世界の市場を見れば，それまでは先進諸国だけの10億人の規模だったが，今や40億人に拡大した。

グローバリゼーションのネットワークのなかにある国々は，お互いに武力行使はせず，国内では民主主義の政治を進め，経済の面で世界の共通市場で競争するのである。戦争の絶えなかった西ヨーロッパで，戦後，戦争をなくそうという強い政治的意志のもとでEU（欧州連合）

を発展させてきた。これは地域連合だが，グローバリゼーションのネットワークのなかにあり，ついに戦争がなくなったのである。しかしグローバリゼーションの及ばない地域があり，そうした隙間で，宗教，民族，利害などの対立から地域紛争が起こっている。

そこでまず，中東でのユダヤ人とパレスチナ人の紛争の現状を英字新聞の記事を引用しながら議論を進めることにする。

An Israeli rocket attack, which the Palestinians say targeted senior Palestinian official Marwan Garghouti, ignited overnight Sunday some of the most violent clashes seen in the occupied territories in months with the sound of gunfire reaching Jerusalem's Old City. (JAPAN TIMES August 6, 2001)

イスラエルのロケット攻撃は，日曜日の夜を通して，占領地（ヨルダン川西岸地域を指す）でのここ数か月で最も激しい衝突を引き起こした。その砲声はエルサレムの旧市街でも聞こえた。この攻撃は，パレスチナの上級職員のマルワン・ガーゴウティを狙ったと，パレスチナ人は言っている。

Israeli police seized Palestinian political centers in east Jerusalem early Friday, and warplanes demolished a security building in the West Bank, in retaliation for an Islamic militant's suicide bombing in a Jerusalem pizzeria that killed at least 15 and wounded nearly 100. (JAPAN TIMES August 11, 2001)

イスラム過激派の自爆テロによってエルサレムのピザ・レストランで死者15人以上，負傷者100人近くが犠牲となった。その報復として金曜早朝，イスラエル警察は東エルサレムにあるパレスチナの政治活動拠点を接収し，軍用機はヨルダン川西岸にあるパレスチナの警察本部を粉砕した。

以上は中東問題のほんの断面に過ぎない。その構図は次のようである。繰り返されるイスラム過激派によるテロ，そのテロリストのリーダーを目標としたイスラエルの攻撃，イスラエルへの復讐の念に燃えるイスラム過激派ハマスによるピザ・レストランへの自爆テロ，それに対して圧倒的な軍事力を誇るイスラエル軍によるパレスチナ政治機構の拠点オリエント・ハウスの占拠である。なぜこれほどまでに報復が報復を呼ぶのか。

わが国は幸い平和である。そのうえ中東は日本から遠い。しかも中東には，日本人には理解しにくい宗教の根深い対立がある。このような理由から，時事英語を学ぶ学生は中東問題に関心はあるものの，どこから手をつけてよいかが分からないのである。

驚きと感動のオスロ合意

イスラエル建国以来の4回の中東戦争を経てユダヤ人はパレスチナの地で領土を拡大し，パレスチナ人との軋轢を高めたが，突如，イスラエルとPLO（パレスチナ解放機構）との間の和平が成立した。1993年8月，両者はノルウェーの仲介によってオスロで秘密の交渉をし，ガザ地区とエリコの暫定自治などで意見が一致した。このオスロ合意に基き，1993年9月13日，アメリカのワシントンでイスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長が「暫定自治に関する原則合意」に署名した。長年の宿敵が平和を誓ったこのニュースは世界中に驚きと感動をもって迎えられた。まず，これを伝えるアメリカの雑誌『タイム』の記事を紹介しよう。この記事にはパレスチナの歴史，現状，今後起こるであろう問題点などがちりばめられているので，学生が中東問題を考えるうえで適切なものであろう。

新聞や雑誌の記事にはデートライン（dateline）とバイライン（byline）がある。デートラインはいつ，どこで，なにが起こったかを報じる記事である。これに対してバイラインは署名記事で，記者の独自の洞察力とオピニオンが表明されていている。記者は署名記事によって読者の信頼を得ようとするので，心血を注いで書く。従って，有力新聞や雑誌のバイライン記事は世論に大きな影響を与える。

歴史的出来事を報じたアメリカの雑誌（TIME September 13, 1993）

The past few years have been an age of miracles. Unimaginable events, consummations devoutly wished for but never really expected, have succeeded one another as if the Creator had whistled up a new world.

The Berlin Wall tumbles. The Soviet empire melts away. Nelson Mandela, free at last, begins to bring democracy to black South Africans. Now comes what must be considered one of the greatest miracles of all : the first acknowledgment by Israelis and Palestinians that can share the land of both call home.

ここ数年間はミラクルの時代であった。想像できなかった出来事が次々と起こった。切に願っていたが，実現するとは予想もしなかった事柄である。あたかも造物主が，新しい世界を一気に造りあげたようだった。

ベルリンの壁は崩壊する。ソビエト帝国は消滅する。ネルソン・マンデラは自由の身になり，南アフリカの黒人に民主主義を持ち込み始めている。あらゆるものの中で最大のミラクルのひとつと考えられるものが現れた――それはイスラエル人とパレスチナ人がともに祖国と呼ぶ地を共有できることを始めて認めたことである。

On paper, what a handful of bargainers have written looks rather small, a narrow agreement on limited self-rule for the 770,000 Palestinians in the Gaza Strip and 1 million more in the West Bank, starting in the oasis of Jericho. Yet the psychological breakthrough in recognizing each other's humanity is huge, the step neither Israelis nor Palestinians would take before. ....The nagging question is whether these two can live with a victory for peace rather than for Israel or Palestine.

合意の条文上は，一握りの交渉当事者が書いたものはむしろ小さく，ガザ地区の77万人と，エリコのオアシスから始めるヨルダン川西岸の100万人を超えるパレスチナ人のための暫定自治についての狭い協定のように見える。それでもなお，お互いの人間存在を認めるという心理的な困難突破の意義は大きい。これはイスラエル人もパレスチナ人も以前は踏み出そうとしなかったことである。

…気がかりな問題は，この両者がイスラエルとかパレスチナのための勝利ではなく，平和のための勝利を大切にできるかどうかである。

....history, of which the Holy Land has a surfeit, at long last is losing its death grip on them. For nearly 100 years, Jews and Arabs have been like Jacob and Esau, battling in the womb for the rights of the firstborn in their ancient motherland.

多くの血を飲み込んだ聖なる地の歴史はついに死の手綱をゆるめつつある。100年近くユダヤ人とアラブ人は，古代の母なる地で初子の権利を胎内で争った（旧約聖書に出てくるアブラハムの子のイサクの子の）ヤコブとエサウのようであった。

Miracle in this case really means a kind of freedom: the two are emerging from the clutches of history to find that strength lies in looking ahead, creating their own choices.

この場合のミラクルは一種の自由を意味する——イスラエルとパレスチナは歴史の束縛から解き放されつつあり，強さは，先を見て，それぞれが自ら選択した道を創造していくことにあることを見いだした。

この記事の記者ジェームズ・ウォルシュは和平合意をミラクルというキーワードで表現した。ここでミラクルというのは，イスラエルとPLOが過去の経験に捕われず，平和に向けて歩み出したことを意味している。和平合意の直後だけに楽観的である。この記事を学生に理解させるには，100年近い紛争の歴史を説明しなければならない。

100年近い紛争

「ユダヤ民族基金」の創設

フランスで1894年，ドレフュス事件が起こった。フランス陸軍参謀本部に勤めるアルフレッド・ドレフュスがユダヤ人であるという理由だけでドイツのスパイであるとの汚名を着せられ，長いあいだ無実の罪で苦しんだ。この事件はユダヤ人に大きな衝撃を与えた。ユダヤ人が軍の中枢にいたということはフランス革命以来の自由，平等，博愛の精神が生かされ，ユダヤ人の同化が進んでいた証拠である。しかし1870年の普仏戦争敗戦以来，ユダヤ人はフランスを亡ぼそうとするドイツ人の手先だとして，ユダヤ人を憎むフランスの盲目的国民感情も強かったのである。

オーストリアの作家でジャーナリストのテオドール・ヘルツルはこの事件を取材し，ユダヤ人に対する差別を痛感し，1896年，ユダヤ人が自国を持つ必要性を説いた「ユダヤ人国家」を発表した。これを契機にパレスチナにユダヤ人国家を建設しよとする運動が始まった。この運動は，エルサレムの別称シオンの丘にちなんでシオニズムと名づけられた。翌年スイスで第1回シオニスト会議が開かれ，世界シオニスト機構（WZO : World Zionist Organization）が設けられられた。1901年には「ユダヤ民族基金」が創設された。こうしてシオニズム運動は資金の裏づけを得て本格化した。

マイヤー・アムシェル（1743—1812）に始まるロスチャイルド財閥の歴史やアメリカ金融市場でのユダヤ人の活躍を見るまでもなく，ユダヤ人は国際金融の面で重要な役割を果たしてきた。金融のグローバリゼーションに対するユダヤ人の貢献は大きい。こうした文脈で見れば「ユダヤ民族基金」の重要性も理解できる。この基金は世界のユダヤ人からパレスチナの土地を購入する資金を集めたのである。

しかし，パレスチナ全域にはグローバリゼーションのネットワークが出来ておらず，紛争が絶えないのが現状である。

増えるパレスチナへの移民

19世紀も後半になると，民族主義の高まりから自らの民族と異なるユダヤ人への迫害が激しくなった。ロシアや東欧の多くのユダヤ人は国を追われ，その圧倒的多数はアメリカへ移民した。しかし一部は，かつてユダヤ人の祖国があったパレスチナの地へ移住した。それでもシオニズムが始まる前のパレスチナのユダヤ人は2万5000人程度といわれる。第1次大戦が始まったときには8万5000人であった。

大戦中の1917年，イギリスのバルフォア外相はシオニストの指導者で財閥のロスチャイルドに書簡を送り，「イギリス政府はパレスチナの地でユダヤ人が民族的領土（ナショナル・ホーム）を樹立することを好意的に受けとめ，そのような目的の達成が容易になるような最善の努力をする」と言明した。このバルフォア宣言に勇気づけられ，シオニズム実現の夢を胸に，イ

ギリス政府からナショナル・ホーム建設の権利をもらったユダヤ人移民が増えた。バルフォア宣言で約束されたナショナル・ホームはユダヤ人に独立国を与えることまでは想定されていなかったが，ユダヤ人は民族のホームランド建設に向けて一歩一歩前進した。それに欠かせないのが土地とそこに住む人である。「ユダヤ民族基金」が土地を購入した。パレスチナ人の有力者，あるいは不在地主から買った土地にシオニストが入植した。

第1次大戦後の1919年から第2次大戦が始まる1939年にかけてユダヤ人の移民が急増した。その主な内訳は次の通りである。

1919年から1923年にかけて主としてソ連から3万5000人が，1924年から1932年にかけてポーランドを中心に6万人が，迫害を逃れて移民してきた。彼らは社会主義を携えてやってきた。パレスチナ人を小作人とすることは搾取になると考えた。そこでシオニストたちはキブツと呼ばれる集団生活をして農業を営み，シオニストの土地からパレスチナ人を排除した。これはユダヤ人だけのホームランドをつくるというシオニズムの理想にも合致していた。

第2次大戦に至る1930年代には，ナチスの迫害を逃れて多くのユダヤ人が移ってきた。その数は正確には分からないが，25万人という推定もある。こうした移民の増加によって近代的な企業や技術がヨーロッパから導入され，パレスチナの伝統的な工業に打撃を与え，失業を増大させた。パレスチナ人はユダヤの近代的な企業には採用されなかった。

ユダヤ人とパレスチナ人の紛争は，「ユダヤ民族基金」が土地を買い始めた20世紀の初めごろからあったが，1930年代になるとパレスチナ人の不満がますます激しくなり，1936年には大規模な反乱が発生してパレスチナ全土に広がっていった。イギリス政府当局は1939年にユダヤ人の移民を制限した。

ユダヤ移民はまた西欧の高度な文化をパレスチナのユダヤ人社会にもたらした。第1次大戦後，いくつかの文化機関が作られた。ユダヤ民族を代表するユダヤ機関（1922年）に続いて，テクニオン・イスラエル工科大学（1924年），エルサレム・ヘブライ大学（1925年）が設立された。そして1936年にはパレスチナ交響楽団（現在のイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）の第1回コンサートが開かれた。

第2次大戦中，ホロコーストから逃げ場を失ったユダヤ人も多かった。彼らはナチスの迫害から逃れるため，イギリスの移民制限にもかかわらず，危険を犯し，闇に紛れて大挙して移民してきた。ユダヤ社会の移民受け入れも十分に機能していた。第2次大戦後のユダヤ人の数はパレスチナの人口の30パーセントに達していた。ユダヤ人とパレスチナ人の対立が激しくなり，治安が悪くなった。このためイギリスに対する不満が高まり，イギリス当局に対するユダヤ人のテロも続発した。

ユダヤ人は第2次大戦では当然のことながら連合国側について戦った。戦後，世界の同情の目はユダヤ人に注がれた。とくにアメリカ国内のユダヤ人を刺激し，シオニズム実現への圧力を高めた。第1次大戦のあと間もなくからパレスチナの地を委任統治していたイギリスはこの問題を国連に委ねることにした。

イスラエル建国と中東戦争

国連のパレスチナ分割案

パレスチナを6分割し，3区画ずつユダヤ人とパレスチナ人に割り当て，エルサレムは国際管理下に置くというパレスチナ分割案が，1947年，国連で賛成33，反対13，棄権10という賛成多数で採択された。アメリカとソ連は賛成，国連加盟のアラブ6か国，イラク，シリア，レバノン，エジプト，サウジアラビア，イエメンは反対した。

パレスチナ全土を自分たちの土地と考えるパレスチナ人にとっては，この分割案は納得のいくものではなかった。シオニストが所有していた土地は全体の5.7パーセントに過ぎなかった。ヨーロッパでのホロコーストの代償としてパレスチナの地の6割近くをユダヤ人に譲ることは受け入れられなかった。

ユダヤ人は当然これを歓迎した。そのころ国連本部はニューヨーク郊外のレークサクセスにあったことから「レークサクセスの奇跡」と呼ばれ，傍聴席のユダヤ人は狂喜し，嬉し涙にむせんだといわれる。この国連決議には米国内のユダヤ人の大きな力が働いていた。

イスラエル独立と第1次中東戦争

1948年5月14日，イギリスが国連決議に基づいてパレスチナから撤退した。この日，テルアビブの博物館でベングリオン初代首相兼国防相が独立宣言を読みあげた。

この独立宣言は「イスラエルの地はユダヤ人の生地であった。その精神的，宗教的，民族的一体性はここで形成された」に始まり，祖国での民族復興の権利は「バルフォア宣言によって認められ」，さらに国連によっても承認された，と述べている。

イスラエルが独立するとすぐエジプト，シリア，イラク，トランスヨルダン，レバノンのアラブ諸国が一斉にイスラエルに攻め入った。初めはアラブ側が有利だった。無防備に近い状態だったイスラエルは，欧米のユダヤ系組織の支援を受け，チェコスロバキアの武器を得て戦った。この第1次中東戦争はイスラエルでは独立戦争と呼ばれている。

新生イスラエルは独立を守っただけでなく，国連の分割案を上回る領土を確保した。負けたアラブ側でもエジプトはガザ地区を，（1949年にトランスヨルダンから国名を改めた）ヨルダンがエルサレム旧市街を含むヨルダン川西岸地域を制圧した。パレスチナの地はイスラエル，エジプト，ヨルダンの3か国で分割された。すでにパレスチナ人が国家をつくる余地はなかった。

1949年の国連パレスチナ調停委員会でイスラエルが得た占領地にイスラエルの法律が適用され得ることが認められた。その領地を引っ提げて，イスラエルは国連に加盟した。

パレスチナ難民

当時のパレスチナの人口はユダヤ人65万，パレスチナ人130万であった。そのうち100万人近

いパレスチナ人（1949の国連報告では73万人）が故郷を追われ，難民となって近隣諸国へ流出した。建国に先立つ4月，ユダヤの過激派イルグンがエルサレム近郊のディール・ヤシーン村で住民を皆殺しにした。この残虐事件はパレスチナ人の恐怖心を煽り，流出を招いた。パレスチナ難民の始まりである。このイルグンの指導者は後の首相ベギンである。

第1次中東戦争が終わる前の1948年12月の国連決議は難民の保障をうたっている。難民の故郷へ戻る権利，故郷に残した財産の損害を，責任ある政府または機関が賠償するなどである。しかしイスラエルは難民の帰還を認めなかった。それ以来半世紀たった今も，多数が難民キャンプの生活を強いられている。イスラエルに留まったアラブ人は少数民族としてイスラエル市民権を与えられたが，いわゆる二級市民の生活を強いられている。

イスラエルの領土拡大や難民の発生で，アラブ諸国のイスラエルに対する憎悪は深まった。敵対するアラブの国々に囲まれたイスラエルは軍備の拡張を最優先課題とし，アメリカからの多額の資金援助を得て，最新鋭の兵器を武器庫に積み上げた。

ナセルと第2次中東戦争

1952年，ガマル・アブドル・ナセルが率いる自由将校団がエジプト王政を倒した。このあとナセルがアラブ民族主義を指導していく。

ナセルはスエズ運河の国有化を宣言し，1956年，英仏が運営していたスエズ運河会社イスマイリア本社を接収した。これに対応して英仏がイスラエルを誘ってエジプトに対して軍事行動を起こした。10月29日イスラエルが先制攻撃を仕掛け，31日に英仏連合軍が介入し第2次中東戦争が始まった。イスラエルがこの戦闘に加わったのは，エジプト軍がソ連の兵器で強化される前に手を打っておきたかったとの思惑があった。この戦争はエジプトに大打撃を与えたが，米ソなどの強い反対にあい，撤退を余儀なくされた。

これによって，19世紀以来中東に君臨してきた英仏の時代は終わりを告げ，米ソが進出する。一方，アラブでは英仏を相手に勇敢に戦ったアラブの英雄ナセルが誕生し，アラブ民族主義の勢いがますます高まった。パレスチナ人の民族自決がアラブの大義になっていく。

第3次中東戦争

周辺アラブ諸国の民族主義の高まりに対し，イスラエルは一定の期間を置いてアラブを軍事的にたたく必要を感じていた。

シリアがイスラエルとの国境の非武装地帯を占拠した。ここはヨルダン川上流で，イスラエルの水資源確保のためにも重要なところであった。またエジプトがシナイ半島東部のチラン海峡を封鎖した。こうしたことを死活問題と見たイスラエルは1967年6月5日，エジプト，シリア，ヨルダンを急襲し6日間で圧倒的な勝利を収めた。この第3次中東戦争は6日戦争とも言われる。その結果，イスラエルはエジプトのガザ地区とシナイ半島（後に返還）を，シリアのゴラン高原を，ヨルダン領のヨルダン川西岸地域を占拠した。そして戦後にイスラエルは占領

地にユダヤ人居住区を建設した。

この戦争でイスラエルは聖地エルサレムの旧市街を占領した。ここにはユダヤ教とイスラム教（それにキリスト教を含めて）数々の神聖な建造物がある。イスラエル側は，西暦70年にユダ王国が亡ぼされてから約2000年ぶりに願いが叶ったわけである。そして，新旧両市街は分割不可能として，1980年，エルサレムをイスラエルの永遠の首都と定めたが，まだ国際的には認められていない。一方，PLO もエルサレムを首都としたパレスチナの国づくりを目指している。このため，エルサレムの帰属が大きな問題になっている。

第３次中東戦争の勝利でイスラエルは領土を拡大しただけでなく，その後，世界のユダヤ人からの財政的支援が約３倍に増え，経済発展を助けた。「イスラエルに世界のユダヤ人から拠金の形で送金された総額は戦前の５カ年間に４億ドルであったが，1967―71の戦後５カ年間には12億ドルにはね上がった。……同様に対比されるのは，戦争の前年1966年にユダヤ人のイスラエルへの総金額は１億2000万ドルであったが，戦争の年1967年には記録的な４億3000万ドルに達したことである。」（ジョン・キムチ『パレスチナ現代史』p.413）

この戦争でヨルダン川西岸とガザ地区で合わせて約40万人が新たに難民となって，ヨルダンへ逃れた。このほかゴラン高原で10万人，シナイ半島で７万人，スエズ運河地帯で30万人の難民が出た。

戦後の1967年11月22日，国連安全保障理事会はこの戦争の処理について決議した。これが国連決議242号で，（１）イスラエル軍隊は今回の戦争で占領した領土から撤退する（２）あらゆる交戦状態を終結し，地域におけるすべての国の主権，領土保全，政治的独立，武力による威嚇または武力行使が行なわれない安全で承認された境界のなかで平和的に生存する権利を尊重する，という２つの原則に立って中東の平和を確立しようとするものである。この決議はその後の和平交渉の拠所になっている。

第４次中東戦争

アラブ側が第３次中東戦争で大敗し，ナセル大統領の汎アラブ主義（ナセリズム）は終わった。1970年に死去したナセルの跡を継いだサダト大統領はエジプト国内に目を向けた。それまでの３回の戦争で10万人を超える死者，数億ドルに達する経済的被害を受けたことを考え，エジプト復興のため，イスラエルとの和平を模索し始めた。そして就任後，その意志をアメリカに伝えたという。

一方，イスラエルは周辺アラブ諸国に対して圧倒的な軍事的優位に立ち，占領地から撤退する様子はなかった。国内ではパレスチナ過激派との対立が続いていた。この機会を捕え，サダトはイスラエルにダメージを与えて和平交渉を有利に展開しようと考え，エジプトはシリアとともにイスラエルを奇襲攻撃し第４次中東戦争が始まった。この日はユダヤ教の祝日である贖罪の日（ヨム・キプール）で，イスラエルは不意を突かれ苦戦したが，アメリカの兵器援助を受け最終的には有利な状態で停戦した。

アラブの産油諸国を主要メンバーとする石油輸出国機構（OPEC）はこの戦争をきっかけに原油の輸出価格を4倍近く値上げし，さらにイスラエルに同情的な国々に石油の輸出禁止措置を取った。中東の石油の輸入に大きく頼ってきた先進諸国の経済は打撃を受け，アラブの力を見せつけられた。

この力を背景にエジプトのサダト大統領は1977年にイスラエルを訪問した。翌年訪米し，キャンプ・デービットでアメリカのカーター大統領とイスラエルのベギン首相と会談し，両国の和平に基本的に合意した。そして1979年にエジプトとイスラエルの和平が正式に成立し，中東和平のオスロ合意へ向けての一歩となった。またイスラエル側からみると，初めてアラブの国に認められたのである。

次に時事英語を教えるに当たって，中東の紛争をパレスチナ人はどう見ているかを説明しなければならない。

パレスチナ人自決の動き

パレスチナ人の国家を創ろうというパレスチナ人自決の動きは，1948年にユダヤ人がイスラエル国を建国したときから始まったのではない。第1次中東戦争では周辺アラブ諸国はパレスチナの地の解放を大義としながらも自国の利益中心に行動した。その結果，パレスチナの地にはもはやパレスチナ国家を建設する余地は残っていなかった。

第2次中東戦争の頃から起こったアラブ民族主義もパレスチナ人の助けにはならなかった。ナセルは19世紀の支配者を駆逐したが，それは新しい力に変わっただけだった。

イスラエルはユダヤ人ロビーを通してアメリカとしっかり結びついていた。アラブ側には奇襲であった第3次中東戦争も「米国は，イスラエルが第三次中東戦争に向けて着々と準備を進め，同国がいつの時点で開戦に踏み切るかといった具体的なことまで，すべて事前に承知していた」（鏡武『中東紛争』p.82）。この戦争でアラブ諸国は大敗し，パレスチナ人は長いあいだ自分たちが住んでいた土地のすべてを占領された。この敗戦まで，「パレスチナ人は難民キャンプの中で，世界の世論は必ず目覚め，国際正義は達成されるものと二十数年待ちわびていたのであった。彼らパレスチナ人は，アラブの敗北によって外部の力に頼るのは，誤りであり，自力で武器をもって闘うことに踏み出したのである。」（PLO研究センター編『パレスチナ問題』p.338）

パレスチナ国家建設運動の中心になったのが，1964年に結成されたPLO（パレスチナ解放機構）で，PLOはイスラエルとの和平に基づいて暫定自治が始まるまでは，パレスチナの外部に本部を置いて，難民問題の処理やイスラエルに対して武装闘争を仕掛けていた。ヤセル・アラファト率いるPLO主流派のファタハは「非宗教的・世俗的・民主主義パレスチナ国家」の建設を目的としているが，第3次中東戦争後の1968年のカラメの戦いで武勲をあげ，彼は

1969年にPLOの議長に就任した。

ハマスについて

ニューヨーク・タイムズの記者トーマス・フリードマンの著書『ベイルートからエルサレムへ』(p.449) によると，PLO細胞が外部から行なった暴力行為と，パレスチナ内部で自然発生的に起こった暴力事件の比率は1977－84年の平均1対11から，85年は1対16，86年には1対18まで増加したという。これは個人やグループが感情を表に出して暴動に訴えたのである。

パレスチナ人の抵抗運動は1987年にインティファーダと呼ばれる民衆の一斉蜂起となり，ガザ地区から始まってヨルダン川西岸地域に広がった。こうした中でハマスが形成されていった。ハマスはPLOには属さず，アラファトの和平交渉に反対している。彼らはイスラム原理主義者と呼ばれるが，その目的はパレスチナ全土の解放，パレスチナ民族の自決なので，パレスチナ民族復興主義者と呼ぶにふさわしい，との見方もある。占領地の若者の多くがハマスを支持しており，イスラエルを倒すため，命を捧げて貢献しようとしている。

アラファトはイスラエルとの和平を模索し始め，1988年テロ活動を放棄すると宣言し，ハマスと対決することになった。なぜ彼が和平を考えたのか。

His (Arafat's) tougher challenge lies among Palestinians inside the occupied territories. Fed up with the P.L.O.'s failures, young Palestinians in the Gaza Strip and West Bank have been radicalized, many of them embracing militant fundamentalist Islam. Conversely, Arafat was compelled toward moderation after the Soviet Union's demise deprived him of a superpower patron, and even more when his mistaken allegiance to Iraq over Kuwait cost him his bankroll from the gulf states. Without money, without visible progress in the two-year-old peace talks he had endorsed, fundamentalism's rise threatened to make him irrelevant. (TIME September 13, 1993)

アラファトの（イスラエルに対するよりも）強硬な挑戦は，占領地内部のパレスチナ人の中（ハマス）にある。PLOの失敗に愛想を尽かし，ガザ地区や西岸地域の若いパレスチナ人は過激化しており，多くは戦闘的イスラム原理主義の思想を抱いている。逆にアラファトは，ソ連の崩壊で超大国の後ろ楯を失ったあと，さらに悪いことに（1991年の湾岸戦争で）クウェートの頭越しにイラクに対して誤った忠誠を示したため湾岸諸国からの資金援助を失ってしまい，柔軟な姿勢を取らざるを得なかった。金がなく，彼が賛成した2年にわたる交渉で目に見える進展もなく，原理主義が高まって彼は不適任だという雰囲気にさせている。

次にハマスの成り立ち，目的などについての雑誌記事を取りあげる。

The "we" Adnan refers to are his fellow supporters of Hamas. Of all the organizations eager to kill the rapprochement between Israel and the Arabs, the millitant Muslim fundamentalist group is probably the greatest threat. An acronym for Islamic Resistance Movement that literally means "zeal," Hamas wants nothing less than the destruction of the Jewish state, followed by the establishment of an Islamic Palestine as a precursor to a greater pan-Arab union. (TIME September 13, 1993)

アドナンが我々と言っているのは彼の仲間のハマスの支持者たちのことである。イスラエルとアラブ側との間の友好関係樹立を葬り去ろうと熱望している組織のなかでも，この戦闘的なイスラム原理主義グループ（ハマス）が恐らく最も大きな脅威であろう。イスラム抵抗運動の頭文字をとり，文字通り「熱狂」を意味するハマスが求めているのはユダヤ人国家を壊滅させ，（パレスチナ全土に）イスラム教のパレスチナ国家を確立し，これを先導役として，さらに大きな汎アラブ連合をつくることだけである。

ハマスの要求はパレスチナ全土の解放である。西岸地域とガザ地区でまず暫定自治を始めるという，いわばミニ・パレスチナ国家建設の道を選択したPLOとは正面から対立している。

The organization was born in the misery and despair of the teeming refugee camps of the Gaza Strip five years ago, two months after the beginning of the *intifadeh*. Within three years the fundamentalists that the Israelis had once allowed to exist as a counter-balance to the P.L.O. were outlawed as the most serious security problem in the occupied territories. Hamas' appeal is both social and political. With money from Iran and private Arab benefactors in the gulf, the organization runs clinics and kindergartens—and candidates for chamber of commerce elections. Preaching radical solutions from the mosques, Hamas has rapidly won converts disenchanted with the foibles and failures of the P.L.O. It now claims support from a majority of the Palestinians in the Gaza Strip and at least 40% of West Bank Arabs. (TIME September 13, 1993)

ハマスはガザ地区のごった返す難民キャンプの苦悩や絶望のなかで5年前に生まれたが，それはインティファーダが始まって2か月後のことであった。イスラエル人はこの原理主義者たちを初めのうちはPLOの対抗勢力としてその存在を認めていたが，占領地の安全を脅かす最も深刻な問題として，結成して3年以内に非合法化された。ハマスの訴えは社会的および政治的の二面がある。イランや湾岸の個人のアラブ支援者の資金で，ハマスは（社会的活動としては）診療所や幼稚園の経営をし，（政治活動の一環として）商工会議所の選挙に候補者をたてている。ハマスはモスクから急進的な解決を唱え，PLOの弱点や失敗に幻滅

を感じたパレスチナ人を急速に取り入れていくのに成功した。今やハマスはガザ地区で半数以上のパレスチナ人の支持を獲得し，西岸地域ではアラブ人の少なくとも4割の支持を得ていると主張している。

ガザ地区で過半数，西岸地域で約4割のパレスチナ人が和平交渉に反対しているわけである。次に引用した一節は，記者がガザ地区にあるシャンティ・キャンプ近くで，25歳のアドナンに聞いた話である。口語体で書かれていて学生にも分かり易いので，ここでは訳は省略する。それによれば，ハマスの支持者たちは，パレスチナ民族国家建設のためには殉教死をもいとわない，と言っている。

Adnan ....promised the destruction of Israel. "Yasser Arafat means nothing to me," he said. "I want all of Palestine back."... "My parents were thrown out of their town in 1948," says Adnan, 25. "Any Russian Jew can live there now, but I have never seen it. We are ready to fight and die as martyrs rather than accept this." (TIME September 13, 1993)

アドナンは難民キャンプに住む若者の典型であろう。この記事から推測されるのは，彼の両親は第1次中東戦争で難民になり，彼はキャンプで生まれ，育ったことである。難民キャンプは塀で囲まれ，内部は人口が密集し，撤去されないゴミが山盛りになっている。難民はこのひどい環境の中の粗末な家で生活をしている。一方，移民してきたユダヤ人は家を手に入れ，よい暮らしをする。パレスチナ人の若者は，この差別を受け入れるぐらいなら闘って殉死することもいとわない。

こうしたパレスチナ人の人権問題は，2001年秋に南アフリカのダーバンで開かれる国連の「人種差別反対世界大会」で取り上げられる予定である。

次の記事は，アラファトPLO議長がガザ入りし，自治政府を設置してから1年が過ぎた頃のものである。「反逆者は統治者になれるか」と題し，自治を巡るアラファトの苦戦ぶりを伝えている。

When Arafat entered the Gaza Strip, he and his aides raised expectations to an absurd height. The initial euphoria was sure to ebb, but Gazans could reasonably have hoped for competence and fairness, pride in their new government and a sense of momentum toward statehood. Instead they have seen organizational anarchy, corruption and autocracy. (TIME July 31, 1995)

アラファトがガザ地区に帰環したとき，アラファトと彼の側近は不条理なほどまで期待を高めていた。最初に感じていた幸福感が弱まっていくのは確かであったとしても，ガザのパレスチナ人が権限と公平さ，新しい（パレスチナ自治）政府に対する誇りと国家建設へ向かって弾みがつくことを望んだのは当然のことであった。その代わりに彼らが見たものは，自治政府の無秩序，腐敗，独裁政治であった。

The Gaza Strip is perennially poor, and the economy's biggest problem right now is that last fall, as a result of a series of Palestinian terrorist attacks, the Israeli government placed restrictions on trade with the territories and the number of Palestinian laborers who can cross into Isarel each day for work. Nevertheless, Arafat and the Authority can still be held responsible for economic mismanagement. (TIME July 31, 1995)

ガザ地区は恒常的に貧しく，今の経済の一番の問題は一連のパレスチナ過激派（ハマス）によるテロが起こったため，昨年の秋，イスラエル政府が占領地との交易と，仕事のため毎日イスラエルに入ってくるパレスチナ人労働者の数を制限したことである。それでも，アラファトとその自治政府が経済政策の失敗の責任を負っている。

難民キャンプに住む多くのパレスチナ人は日々イスラエルに出稼ぎに行き，生活の糧を得ている。イスラエル人入植地の建設など，パレスチナ人にとって心をむしり取られる思いをする仕事もある。93年のイスラエルとパレスチナ合意を受け，パレスチナ自治政府はEU（欧州連合）やアメリカ，日本などから資金援助を受けた。

It is true that Arafat has begun to score successes in everyday governance that amount if not to nation building, at least to nation tending. The Education Ministry has build 250 new classrooms in the Gaza Strip, and half the schools there have been modestly refurbished. Palestinian TV has been broadcasting in the Gaza Strip since last year, and experimental programs began in the West Bank last month. In joint ventures with private investors, the Housing Ministry has put up 4,000 apartments in the Gaza Strip. The hospital in Jericho has been renovated. (TIME July 31, 1995)

アラファトはパレスチナ社会の日々の生活の運営では確かに成功を収め始めた。それは国づくりとは言えないが，少なくとも社会の整備にはなった。文部省はガザ地区で250の教室を新設し，この地区の半数の学校はこざっぱりと改装された。パレスチナ・テレビはガザ地区で昨年から放送しており，西岸地域では先月，実験放送が始まった。ガザ地区では，住宅

建設省が個人投資家との合弁事業で4000にのぼるアパートを建設した。エリコにある病院は修復された。

イスラエル政府による外出禁止令，学校閉鎖，検挙などでガザ地区のパレスチナ人は安全で自由な社会生活ができなかった。日本ではほとんど起こり得ないことがニュースになる。

労働党とリクード党

オスロ合意に漕ぎ着けたのは労働党のラビン首相とペレス外相のコンビであった。ラビン首相がイスラエルの極右派に暗殺され，ペレスが首相に就任した。こうした労働党の指導力に応えるかのように，PLO も重要な決定をした。

Last week the Palestine Liberation Organization made history: it voted to delete from its charter all provisions calling for the destruction of Israel. PLO fighters, some of whom participated in the group's bloodiest exploits, gathered with other members of the Palestinian National Council to consider the change. The overwhelming vote in favor was a boost to Yaser Arafat—and the ongoing peace process with Israel. (NEWSWEEK May 6, 1996)

先週，パレスチナ解放機構が歴史をつくった。PLO はイスラエルの抹消を呼びかける全条項を PLO 憲章から削除することを票決した。PLO が行なった最も残虐な武装闘争に加わった者も含めた PLO の戦士たちは，パレスチナ国民評議会の他のメンバーとともに集まり条項の変更を検討した。圧倒的多数が変更に賛成したことで，ヤセル・アラファトの地位は高まり——イスラエルとの和平に勢いがついた。

このパレスチナ側の和平推進派の勝利に対し，イスラエル側ではこの票決を好意的に受け止める者がいる反面，相次ぐテロのためパレスチナに不信感を抱く者も少なくはなかった。この PLO の票決の約 1 か月後，イスラエルで首相を選ぶ初めての選挙が行なわれ，タカ派リクード党のネタニヤフがペレスを破った。雑誌の記事を読みながら，両党の違いを調べてみよう。

The Prime Minister-to-be says he will respect the agreement but will give Israeli security forces "complete freedom of action" in the West Bank and Gaza Strip to combat terrorism. That would violate terms of the government-signed accords that bar Israeli forces from operating in the autonomous areas under Arafat's control, encompassing most of the Gaza Strip and six West Bank cities, unless they are in hot pursuit of a

fugitive. (TIME June 10, 1996)

次期イスラエル首相はオスロ合意を尊重するつもりだが，西岸地域とガザ地区ではテロ対策のためイスラエル治安維持部隊に「行動の完全な自由」を与えると語った。これはイスラエル政府が調印した合意書の条項を犯すことになる。この条項では，ガザ地区のほぼ全域と西岸地域の6都市を含むアラファト支配下の自治区ではイスラエル部隊の軍事行動を禁止しているが，（パレスチナ側が探している）逃亡者の追求の場合は除かれている。

この発言はパレスチナ自治を脅かすものだが，なんらかの形でイスラエルの部隊とパレスチナ側の衝突があれば，和平交渉を進めてきたアラファトの責任が問題となる。

Although the Oslo accords require him to do so, Netanyahu says he will refuse to talk to the Palestinians about the future of Jerusalem. He so vituperatively —and unfairly— accused Peres of threatening to divide Jersalem that he has cut off any maneuvering room. (TIME June 10, 1996)

オスロ合意ではエルサレムの将来（最終地位）についてパレスチナ側と交渉するよう義務づけられているが，ネタニヤフはこれを拒否すると語った。ペレスはこの交渉で駆け引きの余地を閉ざし，エルサレムを分割し兼ねないと，ネタニヤフは彼を口汚く，ずる賢く非難した。

先に述べたが，イスラエルは第3次中東戦争後にエルサレムを「永遠に分割できない」イスラエルの首都とした。しかし国際的には認められていないので，各国は在イスラエル大使館をテル・アビブに構えている。特に東エルサレム旧市街はユダヤ教，イスラム教双方の聖地であり，エルサレムに関しての最終的な取り決めなくしては和平交渉は成り立たない。

He also pledges to close down Orient House, the P.L.O. headquarters in East Jerusalem, even though the Labor government gave a written assurance, as a secret adjunct to the first Oslo accord, that the office could continue functioning. (TIME June 10, 1996)

ネタニヤフはまた東エルサレムにあるPLO本部のオリエント・ハウスを閉鎖すると公約してる。労働党政府は最初のオスロ合意のときの秘密付随項目として，オリエント・ハウスの機能の続行を文書で保証したにもかかわらず，である。

このオリエント・ハウスは東エルサレムにあるパレスチナ自治政府の代表部であり，外国の

要人を迎えたり，市役所的な役割を果たしていた。ネタニヤフ首相のあと労働党のバラクが首相になり，さらにそのあとリクード党のシャロンが首相に就任した。冒頭で取り上げた紛争激化のなかで，2001年夏，シャロン首相のもと，オリエント・ハウスはイスラエル軍によって接収された。

Mindful of the importance of "facts on the ground", the incoming Prime Minister vowed to lift four-year-old Labor-government restrictions on new or expanded Jewish settlements in the West Bank and the Gaza Strip. (TIME June 10, 1996)

労働党政権はガザ地区と西岸地域のユダヤ人入植地の新規建設と拡大を4年間にわたって禁止してきたが，次の首相（ネタニヤフ）は，「土地の既成事実化」の重要性を心に留めて，この禁止を解くと約束した。

イスラエル元首相のベギンを始め，リクード党は修正シオニズムという思想をもっている。これは，労働党の根底にあるシオニズムより遙かに強硬なユダヤ民族主義である。この小論のイスラエル建国に至る歴史のところで見てきたように，1947年に国連がパレスチナ分割案を採決したとき傍聴席のユダヤ人は狂喜したが，すべてのユダヤ人がこの案に賛成したわけではなかった。その中に修正シオニストと呼ばれる人たちがいた。彼らは神から約束された土地エレツ・イスラエル全土にユダヤ人国家を樹立することを目的にしており，この土地の分割は神の意志に反すると主張する。

このような両党の見解の違いは，イスラエルが第3次中東戦争で占領した土地の扱いでも見られる。労働党はユダヤ人国家が安全に存続できる保証があれば，占領地のすべてとはいえないが，一部は返還可能であり，イスラエルと将来のパレスチナ国家との共存の道を選択した。これに対して，リクード党は完全な安全保障を求め，占領地を手放さないうえ，旧約聖書でいうユダとサマリアの地を守るのはユダヤ人国家イスラエルの使命と考え，占領地にユダヤ人の住宅を建設し，占領地の返還を不可能にするための既成事実をつくっている。

The Palestinians, Netanyahu promised, will never have a state of their own. Negotiations will go forward, but all he says he will offer the Palestinians is a "very generous" autonomy deal : freedom to run their own internal affairs, with the exception of foreign policy and overall security. The Palestinians already have that. (TIME June 10, 1996)

パレスチナ人は祖国を持つことにはならない，とネタニヤフは公言した。和平交渉は続けられるだろうが，彼が言うところでは，パレスチナ人に与えるのは「非常に寛大な」自治の実施がすべてである，つまり自らの内政を行なう自由である。ただし，外交政策と全般的な

安全保障は除かれる。パレスチナ人はすでにネタニヤフの提案する自治を実行している。

1999年７月，労働党のバラクがネタニヤフを破ってイスラエルの首相になった。バラクは公約通り精力的に和平交渉と取り組んだ。バラク首相とアラファト議長は９月４日エジプトのシャルム・エルシェイクで協議し，パレスチナ問題解決の最終期限に合意した。同月13日までに和平交渉を再開し，１年以内にパレスチナ暫定自治政府が最終地位に移行するに当たっての問題（エルサレムの最終地位，イスラエルの入植地，パレスチナ難民，将来パレスチナ国家が樹立された場合の国境問題などすべての問題）で最終的に合意することである。これはシャルム・エルシェイク合意と言われる。

2000年９月13日の期限を控え，７月にアメリカ大統領クリントンを仲介役としてバラク首相とアラファト議長がキャンプ・デービッドに集まった。「北アイルランドやボスニアなど多くの和平交渉に立ち会ってきたが，歴史，宗教，政治，民族感情のどれをとっても，これほど難しい問題はない。成功の保証はまったくない」（『朝日新聞』2000年７月26日）と言うクリントン大統領の言葉通り，多くの問題が集中するエルサレムの主権問題については妥協は成立しなかった。 アラファトの立場，バラク首相の妥協案，アラファトの拒否が書かれている記事を読んでいきたい。

Arafat's fear of looking like a fool, or worse, in any final deal with Israel was accentuatd by Israel's offer to Damascus, in since-aborted talks, to return 100% of the territory it seized from Syria in 1967. Then, in May, Israel withdrew from all of south Lebanon, ending an 18-year occupation. Accordingly, Arafat doesn't see why he should settle for less than total relinquishment of the West Bank and Gaza Strip. (TIME July 17, 2000)

イスラエルはシリアとの再開された交渉で，1967年の第３次中東戦争でシリアから獲得した占領地の100パーセントを返還するとシリア政府に提案した。（このイスラエル＝シリアの和平交渉でシリア側が成功したので）アラファトはイスラエルとの最終交渉で能無しかそれ以下に思われるのではないか，という恐れに拍車がかかった。そして５月イスラエルはレバノン南部に展開していたイスラエル軍をすべて撤退させ，18年間の占領に終止符をうった。従ってアラファトは，西岸地域とガザ地区からのイスラエル軍の全ての撤退を要求してるわけではないので，パレスチナ自治政府の主張は通るべきだと見る。

...NEWSWEEK has learned, Barak was ready to give full sovereignty to Arafat in some Arab neighborhoods of East Jerusalem while leaving the status of the Old City and holy sites unresolved. "There will be a mutual agreement that Jerusalem is the capital

of Israel and Al-Quds [the Arabic term for the city] is the capital of Palestine," said a senior Barak adviser. (NEWSWEEK July 31, 2000)

ニューズウイークが聞いたところによると，東エルサレムの旧市街と聖地の地位は未解決のままにするが，東エルサレムのいくつかのアラブ人居住地の完全な主権をバラクはアラファトに与える用意がある，という。「エルサレムはイスラエルの首都であり，また将来のパレスチナ国家の首都であるという相互協定が結ばれるであろう」と，バラクの上級アドバイザーは語った。

At Camp David, Barak proposed that Palestinian leader Yasser Arafat get control over the mosques—but not sovereignty. Arafat wanted sovereignty to boost his status with Muslims, so he rejected the proposal. He warned left-wing Israeli supporters that if he compromised on Haram al-Sharif, fundamentalists might oust him. (TIME October 16, 2000)

イスラエルのバラク首相はキャンプ・デービッドで，パレスチナ自治政府議長ヤセル・アラファトがイスラム教の複数のモスクの管理権を有し，主権はイスラエルにある，という提案をした。アラファトはその主権を得て，ムスリムのなかでの地位を高めたいので，このバラク妥協案を拒否した。彼がもし（ユダヤ教で神殿の丘と呼ばれる）ハラム・アシャリフの主権で妥協すれば，イスラム原理主義者たちが黙っていないで，彼を失脚させるだろうとアラファトはイスラエルの左翼支持者たちに警告した。

For much of the past seven years, Israeli and Palestinian negotiators have been creeping close to agreement on many issues, but not this one. (TIME October 16, 2000)

過去7年間の多くを，中断を繰り返しながらも和平交渉に携わってきたイスラエル人とパレスチナ人は多くの問題でどうにか合意に達しようとしてきたが，この問題だけは妥協が見いだせない。

エルサレムの神聖な丘

東エルサレムの旧市街にあるユダヤ人のいう神殿の丘，イスラム教ではハラム・アッシャリフは両宗教の聖地である。1967年の中東戦争でイスラエルが勝利するまでは，ユダヤ人がこの聖地に入ることは許されていなかった。それは，裏返して言えば，イスラム教徒がイスラム教第3の聖地の主権を失った時である。主権の奪回と保持を巡ってパレスチナとイスラエルは対

立し，解決の糸口は見いだせなかった。この神聖な丘について，その様子や歴史を雑誌の記事で読んでみよう。

To walk in this sacred place is to understand the visceral hold it has on Jews and Muslims. It doesn't take long. You can pace from one side to the other in five minutes. But what worlds you pass in a handful of time! (TIME October 16, 2000)

この聖なる地を歩くと，ここはユダヤ人やイスラム教徒の本能に訴える威力を放っていることがわかる。時間はかからない。ゆっくり歩いて端から端まで5分である。しかしこの短い時間でどれほどの世界を通っていくことだろう！

On your way in, you may pass old, tired Jews leaning for support and planting kisses on the Western Wall as if they were caressing their grandchildren. Moments later, you skirt by a Muslim scholar, a white turban wrapped around his scarlet fez. He is bent double in the shade of a pine, scrubbing his feet and hands as he prepares to pray in al-Aqsa Mosque. (TIME October 16, 2000)

中に入ろうとすれば，嘆きの壁に頭をもたれて助けを求め，あたかも孫を愛撫するかのように壁に口づけしている年老いて，疲れたユダヤ人に会うかも知れない。その直後，真紅のフェズ（トルコ帽）のまわりに白いターバンを巻いたイスラムの学者のそばを通る。彼は松の木の木陰で2回頭を地につけて祈り，足と手を清めアル・アクサ・モスクでの祈りの準備をしている。

And the gold of the Dome's roof—vibrant 1,300 years after it was built— reflects the sun back into the sky and reminds you, no matter what your faith, that there is a force larger than man. (TIME October 16, 2000)

そして（岩の）ドームの黄金の屋根は，建築後1300年を経た今でも鮮やかであり，太陽の光を空に反射させている。信仰が何であれ，人より大きな力が存在すること思い起こさせる。

To Jews, the site is revered as the location of the temples built by Solomon and Herod, the latter of which was destroyed by the Romans in A.D. 70. Even before that, it was sacred. At its center is the tip of Mount Moriah, where God tested Abraham by demanding the sacrifice of his son Isaac. (TIME October 16, 2000)

ユダヤ人にとっては，この神殿の丘はソロモン王が神殿を建て，その後ヘロデ王によって改築された神殿があったところとして崇敬されている。ヘロデ王が改築した神殿は，西暦70年，ローマ帝国によって破壊された。神殿建築以前でもそこは神聖であった。その中心にはモリヤの丘の頂上があり，神はここでアブラハムの信仰心を試そうとして，その息子のイサクを神への捧げ物にせよと求めたのである。

That rock is where some scholars believe the Ark of the Convenant sat. But it also lies beneath the golden Dome of the Rock, the spot where Muslims believe the Prophet Muhammad ascended into heaven and back. (TIME October 16, 2000)

この岩はユダヤ教の契約の箱があったところだと信じる学者がいる。しかしそれは（イスラム教の）黄金の岩のドームの下にあるとも言われている。イスラム教徒は，ここが預言者ムハンマドが昇天し，戻ってきた場所であると信じている。

The main mosque in the compound is al-Aqsa—also 1,300 years old. More sacred to Muslims than any place except Mecca and Medina, the Mount is the single most holy spot for Jews as well. (TIME October 16, 2000)

この宗教複合体の主要なモスクはアル・アクサ・モスクであり，1300年前に建てられた。メッカ，メディナに次ぐイスラム教第3の聖地である。神殿の丘はまたユダヤ人にとっても唯一の最も神聖な地点でる。

エルサレム帰属問題で見出せない解決策

イスラエルの労働党政権でさえ，パレスチナ自治政府議長との間で，エルサレムの主権がどちら側に帰属するかについて解決の糸口さえ見出せないでいる。バラク首相とアラファト議長の双方に妥協を許さない事情があった。バラク首相の譲歩案には反対があり，レビ外相が辞任するなど，その政治基盤が弱かった。一方，アラファトは「エルサレムを首都とする」パレスチナ国家をパレスチナ人に約束していた。さらに，聖地エルサレムの主権はハマスやアラブ諸国だけでなく，イスラム教徒全体の関心事であった。こうした事情から，アラファトは妥協ができなかったのである。

和平反対派は，イスラエル国内ではリクード党やユダヤ教原理主義者など。パレスチナ側では，ハマス，PLO内の過激派。それに，レバノンのイスラム教シーア派過激組織のヒズボラもイスラエルの壊滅を目指す。目標達成のためパレスチナ側はテロに訴える。イスラエル側は占領地の安全確保という名目で，テロに対して軍事行動を取る。オスロ合意は話し合いによる

解決を目指すが，その反対派は武力行使で解決しようとする。

まとめ

以上，英字新聞や雑誌の記事を，日本語での解説を加えながら，読んできた。実際の授業では英文記事に掲載されている年表などを利用し，その事件の歴史や背景を英語の表現で説明している。

和平交渉の焦点は難民問題，入植地問題，領土問題，エルサレムの主権問題である。歴史をしっかり教えることが大切である。それによって，特にこの50年間に中東では4回の戦争があり，土地の奪い合いで今述べた問題が起きたことを学生は理解する。パレスチナの地では，イスラエル人とパレスチナ人は「表裏一体」の関係にある。表が広がれば裏も広がっていく過程は宗教的な要素だけではないことを，学生は理解する。

またこのパレスチナ問題を世界の視点から見ると，次のようになる。ヨーロッパの覇権が中東に及ぼした強い圧力，東西の冷戦構造のもとでのユダヤ人とパレスチナ人の対決，冷戦終結とともに表面化した民族主義の高まり，ソ連崩壊と湾岸戦争後のPLO議長アラファトの力の低下と過激派の伸長，イスラエルのラビン首相の暗殺に見られる和平抵抗勢力としてのユダヤ民族主義，などである。このようにパレスチナ問題は世界情勢のまっただ中にある。

この紛争の続くなかでも，和平交渉を通じて平和を求める人たちがいることを教えると，学生は安心し，遠い中東にも親しみを覚えるのである。

（本学講師＝英語担当）

参考文献

朝日新聞外報部（1982）.『中東のすべて』朝日新聞社

アシュラウィ，ハナン（2000）. 猪俣直子訳『パレスチナ報道官　わが大地への愛』朝日新聞社

エマソン，グロリニ（1991）. 鴨志田千枝子・佐藤正和訳『占領地ガザ―抵抗運動インティファーダの日々』朝日新聞社

小田原紀雄・村山盛忠編（1989）.『パレスチナ民衆蜂起とイスラエル』第三書館

鏡　武（2001）.『中東紛争』有斐閣

カッティング，ポーリン（1991）. 広河隆一訳『パレスチナ難民の生と死　ある女医の医療日誌』同時代ライブラリー69　岩波書店

キムチ，ジョン（1974）. 田中秀穂訳『パレスチナ現代史』時事通信社

ギルバート，マーチィン（1998）. 白須英子訳『エルサレムの20世紀』草思社

サイード，エドワード・W（1986）. 浅井信雄・佐藤成文訳『イスラム報道』みすず書房

サルトル，ジャン＝ポール編（1971）. 伊東守男訳『アラブとイスラエル―紛争の根底にあるもの』サイマル出版会

芝生瑞和（1993）.『パレスチナ合意―背景，そしてこれから』岩波ブックレット NO.322　岩波書店

高橋和夫（1992）.『アラブとイスラエル　パレスチナ問題の構図』講談社
高橋正夫（1996）.『イェルサレム』―世界の都市の物語14―文藝春秋
土井敏邦（1995）.『「和平合意」とパレスチナ』朝日新聞社
ハルカビ，イェホシャファト（1990）．奈良本英祐訳『イスラエル・運命の刻』第三書館
藤村信（1997）.『中東現代史』岩波書店
ヒルシュ，エレン編（1997）.『イスラエルという国』イスラエル・インフォーメーション・センター
PLO 研究センター編（1972）．阿部政雄訳『パレスチナ問題』亜紀書房
平山健太郎（1992）.『エルサレムは誰のものか』日本放送出版協会
フリードマン，トーマス・L（1993）．鈴木敏・鈴木百合子訳『ベイルートからエルサレムへ』朝日新聞社
ヘルツォーグ，ハイム（1985）．滝川義人訳『図解中東戦争―イスラエル建国からレバノン進攻まで』原書房
ペルトン，ロバート・ヤング（1999）．大地舜訳『世界の危険・紛争地帯体験ガイド』講談社
水口章編（1999）.『中東研究（月刊）12月号』財団法人中東調査会